

滋賀県琵琶湖地域

平成30年度
認定

森・里・湖（うみ）に育まれる漁業と農業が 織りなす琵琶湖システム

多くの在来魚が生息する琵琶湖の湖辺では、弥生時代以降、人が開発した水田にニゴロブナ等の湖魚が遡上し、そこを繁殖場として利用するようになりました。そして、人は農作業の傍ら、こうした湖魚を捕獲する待ち受け型の漁法を発展させてきました。

漁法の代表格はエリ漁です。鎌倉時代には、漁獲の競合に対処するためエリの設置を制限するなど社会的な仕組みも築かれ、現在の資源保全や漁業調整の礎となっています。

漁獲された湖魚は、「ふなずし」等の「なれずし」にも加工され、重要な保存食となるほか、客人をもてなす御馳走や祭礼でのお供えとしても用いられてきました。

こうした食文化は、漁業や農業を受け継ぐ精神文化的な基盤の醸成に寄与してきました。また、多様な主体が参画して琵琶湖の水質や生態系を保全する、現代の「環境こだわり農業」や水源林保全にもつながってきています。



1



2



3

1 早朝、朝もやの中で漁獲を待つ伝統的なエリ（小型の定置網）

2 琵琶湖の恵み（多彩な漁獲対象魚）

3 湖の魚が産卵にやってくる「魚のゆりかご水田」での「生きもの観察会」



1



2



3

1 美方郡香美町村岡区熊波の棚田放牧風景

2 全国の黒毛和種の99.9%の祖先に登場する名種雄牛「田尻」号

3 全国の和牛改良の基礎となった「牛籍簿」

兵庫県兵庫美方地域

平成30年度
認定

兵庫美方地域の但馬牛システム

美方郡の集落は山間部の谷筋にあり、水田面積が小さく積雪が多いため、冬季の出稼ぎ、但馬牛飼育、米作りが農家の生活を支えてきました。

美方郡産但馬牛は、地域産の良質な草を与えられ、山に放牧され、棚田に使役されながら家族同様に大切にされてきました。生産された子牛は農家の重要な収入源であり、古くは嘉永2年（1849年）に子牛市を開設した記録があります。明治30年（1897年）頃に全国に先駆けて「牛籍簿」が整備され、これが血統登録の基礎となり、全国の和牛改良の先頭に立つ地域となりました。

美方郡では全国の黒毛和種で唯一、郡内産にこだわった改良を続けてきた結果、世界でもここにしかない独自の遺伝資源が保全され、黒毛和種の遺伝的多様性の維持に大きな役割を果たしています。

兵庫県丹波篠山地域

令和2年度
認定

丹波篠山の黒大豆栽培

～ムラが支える優良種子と家族農業～

丹波篠山地域では、江戸時代から水不足のため稲作をしない「犠牲田」を集落で協力し合いながら分け、そこで黒大豆栽培が始まりました。水田の多くが、加湿・重粘土な湿田で、これを乾田化することは技術的に困難でしたが、溝を掘り、畝を高くすることで、黒大豆栽培を可能にしました。（乾田高畝栽培技術）

明治時代には、豪農大庄屋 波部本次郎らによって在来種（多様な遺伝資源）の中から優良な種子が選抜育種され、現在では採種ほ場を分散設置するなど持続的に優良な種子を生産しています。（優良種子生産方式）

水の少ない丹波篠山地域では、多くのため池が築造されたことで希少な両生類などが生息しています。また、粗朶（そだ）や落ち葉を灰小屋で焼いて作る灰肥料が用いられるなど、農の営みの中で自然環境が守られています。（自然循環システム）



1



2



3

1 丹波篠山市黒大豆栽培の風景 2 灰肥料をつくる「灰小屋」 3 黒大豆の手選り



1



2



3

1 水稲とたまねぎ小屋 2 円筒分水による配水 3 長屋門の牛舎

兵庫県南あわじ地域

令和2年度
認定

南あわじにおける 水稲・たまねぎ・畜産の生産循環システム

水と土地に限りがある兵庫県南あわじ地域では、律令時代から開墾とため池などのかんがい施設の整備が進みました。特に江戸時代以降の新田開発にともないかんがいの高度化が進み、ため池、河川、用水路といった表層水と、湧水、深井戸、浅井戸、横井戸といった地下水を組み合わせるかんがいシステムが構築されました。また、これらのかんがい施設の管理運用は「田主（たず）」と呼ばれる組織が社会組織化され、新田開発などにより発展してきた水稲作の上に、1880年代に加えられたのが、たまねぎ栽培です。ほぼ同時期に、役用牛から畜産（酪農）への転換が進められました。

この結果、高度に発達した水利システムを基盤として、初夏から秋にかけて稲作を行い、その後、秋から春にかけてたまねぎを栽培します。同時に稲わらを畜産に利用し、牛ふん堆肥を砂礫の多い農地に土壌改良としてすき込みます。これにより、畑雑草や病害虫を抑制させ、たまねぎの連作を可能とする生産循環システムが確立されました。